



Title	ペーター・ハントケの『充実日試論』について
Author(s)	瀬川, 修二
Citation	独語独文学科研究年報, 20, 145-156
Issue Date	1993-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25956
Type	departmental bulletin paper
File Information	20_P145-156.pdf



ペーター・ハントケの『充実日試論』について

瀬川修二

序文

ペーター・ハントケの『充実日試論』(1991年)¹⁾は『疲労についての試論』(1989年)²⁾、『ジュークボックス試論』(1990年)³⁾と並んで試論3部作の1つを構成している。この3部作の中で特に『充実日試論』は最近のペーター・ハントケの文学的傾向を顕著に示しているという点で非常に興味深い作品である。ペーター・ハントケは1966年の処女作『すずめばち』⁴⁾以来、今日に至るまで様々なジャンルにわたって多くの作品を書いて来た。これらの作品は初期からすでに、そのテーマ、文体において独自の、新しい文学的試みであったにもかかわらず、その新しさは最初、多くの読者や批評家によって理解されず、拒否、批判されて来た。この読者や批評家による誤解、批判はハントケ受容の中で何度か、繰り返され、今日においてもハントケ拒否、批判は続いているようにも見える。これまでのハントケの多様な文学活動を振り返ってみると最近の作品は比較的、同一のテーマを追及しているように思える。このテーマは簡単に言えば、生活光景の美や自然美である。このテーマが作品の主要テーマになったのは1977年の手記『世界の重み』⁵⁾と1979年の物語『ゆるやかな帰還』⁶⁾が最初である。これらの作品はその当時、前者は日常生活の単なる私的な記述として、後者は宗教的、難解な作品として批判され、理解されなかった。しかし、その後、続けてハントケは風景、場所を描く作家として同じテーマで多くの作品を書き、かれのテーマを繰り返しながら、明確化しようとしてきた。我々読者にとっても最初は理解困難であったものが、その後の物語、手記、対話集などで徐々にそのテーマが明白になって来たことも事実である。

『充実日試論』はこの数年のテーマを充実日という理念に発展させたものだと言えるだろう。作品形式としては、全体的にはエッセイ風に理念としての『充実日』が模索され、また同時に物語られる。最終的には充実日は具体化されないが、しかし、理想とされる生活規範としておぼろげながら、見えて来るように思われる。この小論はハントケの充実日構想がどんなものであるか、また、この構想は場所を物語る作家⁷⁾としてのハントケの最近の文学的発展とどのような関係があるのかを明らかにしたい。

まず、この作品の原文のタイトル „Versuch über den geglückten Tag“ について説明が必要であろう。直訳すると『成功した日についての試論』となる。geglückt は glücken の過去分詞として“成功した、うまくいった”という意味になる。「成功した日」という表現はその日に何かが成功した、という意味ではなく、その日それ自身が成功した、という意味である。ハントケは、自分にとって「成功した日」は「成功した手術」、「成功したチェスの一手」(10、11)などの慣用的表現で使われる時とは違って、もっと多くのことを意味し、それは比類のない、独自のものであることを強調している。「成功した日」を「充実日」と訳すのは正確ではないが、1日を充実したものとしていかにして成功させるかが、この作品のテーマとなっているので意識になるが、とりあえず、タイトルを『充実日試論』とした。ハントケは、“1日を成功させる、充実日を成功させる事が1つのテーマになり得るということ、それは我々の特殊な現代と関係があるのではないか？”と疑問を呈示しながら、歴史をギリシャ時代までさかのぼり、人間の生活感情、人生観を大きく3つに区分している。かれの史的概観を簡単にここで要約したい。

1. ギリシャ時代、人々には例えば、羊の群れを追い回している時やアクロポリスの下を放浪している時など感動に捕えられる瞬間があり、その体験から、生のそれぞれの瞬間に顕現する神への信仰が生まれた。この瞬間の神はいわゆるギリシャの神々とは異なってその具体的姿や物語りは存在していなかったが、瞬間、瞬間にその姿を表し、自己を、すなわち、カイロス（満たされた時）を語っていた。そしてこの瞬間の神への信仰が人間の全人生を充実させ、保証したのだ(11、12)とハントケは言う。

2. その後、ギリシャの瞬間の神はキリスト教の神に取って代わられる。キリスト教の神は瞬間を越えた永遠性を約束する。神の子の降臨、死、復活によって、永遠性の信仰が現れる。

「それまでのあらゆる瞬間、時代を完成させる新しい神の国への愛による信仰、」(12)

3. 最後にいわば、第3の力として現代にも通じている時期が来る。それは瞬間の神、永遠性の神からも解放され、現世だけを問題にする。

「私を越えるものはもはや、何も考えられないから、私は私の人生から可能な限りのものを作り出そう。」(14)

現世の成功、個々人の成功した人生が問題になる。ハントケは自分の人生に何らかの足跡を残す行為は常に“樹を植える、子供を作る、本を書く”という公式のヴァリエーションになる。」(14)と言う。

この3つの生き方は、時間の長さという観点から見れば、瞬間、人間の寿命(人生)、永遠の順序になる。そしてそのいずれかを人間の生を規定し、支える時間単位として通用させるかが問題になる。

この中で第1の瞬間の神、瞬間の感動を人生の規範とするギリシャ時代の生き方がハントケの人生観に最も近いと言える。この瞬間の感動をハントケは最近の作品の中で風景美、日常生活の光景美として描いている。しかし、ハントケは時間単位としての瞬間は余りにも短すぎるせいか、それを生全体の規範にまですることは出来ない。第2のキリスト教の永遠性の信仰は現代ではもはや、その効力をすでに失っていると言えるだろう。第3番目の生き方が現代でも効力がある。自分の活動を通して人生を成功させる考えは我々現代においても自然な生き方と言えるだろう。「人生に成功する秘訣」というタイトルの本は現代でもどこかで出版されているだろうし、“自分の人生を成功させる”、“あるいは自分の人生が成功した”と考えている人は相変わらず、多いであろう。しかし、ハントケは個々人の人生の成功は現代では徐々に信仰にすぎなくなっているのではないかと疑問を投げかけている。個人の人生の成功、偉大な人生についてはもうすでに語り尽くされ、現代ではもはや通用しなくなっているのではないかとあるとしても小さなヴァリエーションしか存在しないのではないかと現代では個人のサクセス・ストーリーはもう、夢であり、ただ残っているのは自分の人生は成功したのだという信仰だけである、とハントケは言う。

1日を成功させる考えは瞬間の成功、人生の成功、永遠性の成功とは異なった第4の可能性と浮かび上がる。はかない瞬間よりも長く続き、長い人生、永遠よりも短い、時間単位としての1日、この1日を成功させることがハントケにとって問題になる。

「20世紀後半では永遠性の理念や人生全体の成功という理念よりも個々の日を成功させるという考えの方が有効ではないか？それは“今は今”、“日々を漫然と生きる”という意味ではなく、1つの時間帯の諸要素を研究することにより、もっと大きな、更に大きな、そして最大限の時間帯の1つの模範を予感したいという希望、いや憧憬、いや欲求から生じるものなのである。」(20)

2

「成功した日」とはどんな日のことであろうか？それはハントケにとって最初は「～の日ではない。」という否定形でしか、定義出来ないものである。それは普通、我々が一般的に考えるような、いわゆる、「幸福な日」、「心配のない日」、「素晴らしい日」(9)のことではない。「思い出に残る、過去の、なつかしい日」(9)でもなく、「科学、祖国、人類の偉大な日」(10)でもない。

ハントケはローマ詩人ホラティウスの言葉、carpe diem(16)の解釈を通して、日々の過ごし方の可能性を考える。「日々を利用せよ(役立てよ!)」と解釈すると、それは現代の活動の世紀の能動的な生き方と一致する。毎日の行いを通して自分の人生を作り出すのである。

「日々の好機をつかめ!」と解釈すると、1日は唯一の、偉大な、恵まれた瞬間になる。瞬間として捕らえられた1日を好機として生かすことが求められる。ハントケは「日々を実らせよ!」という風に解釈すると、彼の日々を成功させる理念に最も近いものとなる、と言う。最初の2つの解釈では個人のいわゆる有益で、意味ある、充実した積極的な行為が求められることになるが、最後の解釈では1日は果実のように熟し、実るものとして考えられている。「成功した日」を「充実日」と意識したが、その意味は1日が何かの行為、出来事によって充実するというのではなく、1日それ自体が純粹に充実するということである。つまり、充実日には特にその日を充実させるような意味のある行為がなされるのではない。むしろ、最小限の行為が要求される。その日、いわゆる何も特別な事は企てないが、それでいて充実しているような日が充実日として想像される。充実日のタイトルがふさわしい歌としてハントケはヴァン・モリソンの歌を引用する。モリソンの歌はほんの1分の短いバラードで、恋人との日曜日のドライブでの出来事、山の釣り、軽食店、恋人の髪の輝きを話すように歌い、最後の歌詞は「なぜ、毎日が今日の日のようでないのか?」(18)で突然、終わる。ハントケはモリソンのいわば、通りすがりのつぶやきのような歌に、今日における充実日の成功の難しさを感じ取るが、同時に彼の充実日のイメージが具現化されているのを見る。この歌は確かに日曜日、仕事から解放され、恋人とドライブすることの幸福を歌っているが、しかし、ハントケはそこに充実日を見だしているのではない。そのような日は多分、幸福日であり、そのような体験は誰にでもあるだろう。ハントケはモリソンの歌から、単なる幸福感ではなく、生きていることの強烈な充実感と同時にその無常感(なぜ、毎日が今日の日のようでないのか?)を感じ取っているのではないか?ハントケは日曜日こそ、他の日よりも充実日にすることが難しいと言っている。というのは日曜は特に何か企てられる日であり、ハントケの考える充実日はなんらかの企てや出来事を排除するものである。

「例えば、小さなハイキングのような企てさえも日々の成功とは相容れないように思える。この1日それ自体だけでも1つの企てであり、一番良いのはその場ですぐ、私によって実行される(家へ持ち帰って、安全な場所にしまう。)べきであり、それはもっぱら横になったり、座ったり、立ったり、そしてせいぜい、少しあちこち歩く、何もせず、見る、聞くだけ、あるいはただ呼吸するだけで実現されるような企てなのです。しかし、それらの行為はその日のその他の行為と同様、完全に意図せずに、意志が加えられることなく、まるで完全な無意識性がまさしく、日々の成功にとって決定的なものであるかのよう。」(30、31)

何かをする意志もなく、ただ、横になったり、座ったり、少し歩いたり、見たり、聞いた

りすることが日々を成功させるために必要だ、と述べられている。しかし、我々にとってそのような生き方は、1日を無為にぶらぶら過ごすことであり、退屈と空しさしかもたらさないのではないだろうか？我々は仕事を離れて、自由な時間が出来れば、なんらかの行為でその時間を満たそうとするのが普通である。無為でありながら、1日が成功することは可能なのだろうか？

“1日という存在はそれ自体として、存在しており、それ自体が1つの企てである”、とハントケが言う時、それは1日をただ、生きているだけで、十分幸福であるということの意味しているのではないか？1日という時間帯は何かの企て（仕事、レジャー）によって過ぎされ、埋められるのではない。すなわち、言い換えるなら、1日という存在（時間帯）が何か他の事をするために利用されたり、その手段となっはいけない、ということである。そのために個人の行為の完全な無意志性が求められる。1日という生の存在があることが、十分に感じとられ、何かをしなくとも、ただ存在していること、生きていること自体が充実しているような、そんな日が求められる。

“充実日”という言葉は『ゆるやかな帰還』（1979）にすでに現れ、次のように説明されている。

「かつてゾルガーは充実日の理念を抱いたことがあった。そんな日には朝になる、夕方になる、つまり、明るくなったり、暗くなったりするという事実だけでもそれだけで十分な美であるに違いない、と思った。」⁹⁾

旧約聖書の創成記第1章天地創造の章では神が初めて天地創造した第1日目には闇に光を創り、昼と夜を命名し、それにより、夕方になり、朝になり、1日が終わると書かれている。昼と夜、朝と夕方を作ったのは神の天地創造の7日間の行為の最初の行為である。それゆえに朝になる、夕方になるだけで十分な美を感じることは世界の原始への予感であり、存在することの最も根源的喜びに通じているのかもしれない。

3

「空っぽのプールほど空っぽに見えるものはない」⁹⁾という言葉はハントケは初期の作品にモットーとして引用している。我々にとって見慣れ、無意識に知覚されている現実を意識化し、違った観点から現実を見ることを自分の文学の出発点にしてきたハントケにとってこの言葉は深い意味を持っていたにちがいない。我々がプールを見るときはたいてい、水が入っている。水とプールは切り離すこと出来ない、一緒のものとしてイメージが固定化されている。だから、水のないプールは我々に見慣れないものとして、余計に空虚に感じられるのだ。しかし、プールから水が、つまり中味がなくなることによって、プールそのものの姿が現れて

くる。水は本来、プールの目的のために不可欠なものであるが、一方プールそのものの存在を覆い隠していると言える。プールとその中の水との関係は言語についてもあてはまらないだろうか？言葉にはそれが指示する意味内容（水）と言葉それ自体、すなわち記号表現（プール）と2つの要素から成り立っている。そして普通、我々は言語表現そのものよりも言語内容だけを考えがちである。ハントケは初期の文学エッセイで、文学においては言語の意味、内容の側面ではなく、言語表現それ自体に注意に向けられねばならないことを強調し、言語表現それ自体が反省されていない点から、その当時の同時代作家を批判して来た。言語に対すると同様に、ハントケは映画や劇の個々の行為、セリフ、出来事が何かのテーマや目的のために意味づけられることを嫌い、仕草、動作そのものに注意を向けようとしてきた。

「行為は行為自身を示している。言葉は言葉自身を語っている。劇場であらゆる言葉、行為の行方(Finalität)を1つのテーマに沿って、1つのストーリーに沿って期待している観客は行為だけと対面する。手を上げることは1つの物語である。口ずさむことも1つの物語である。座ること、横になること、立っていることも物語である。……どの言葉、どの音、どの動作も1つの物語りである。それらは何物にも至らない。それだけで明白であり続ける。」¹⁰⁾

ハントケは映画や劇の意味づけられた行為、動作にたいしてサーカスの演技を対置させる。なぜなら、サーカスの演技は劇の行為のように意味や目的があるわけではない。サーカスの演技はそれ自体を示している、演技を越えた意味を提示しているのではない。¹¹⁾

ハントケにとって問題なのは、あるものがそれを越えた、それ以外の何かの手段となることではなく、それ自体として存在していることを示すことである。プールそのものの存在、言葉そのものの存在、人間の行為、動作そのものの存在、有用性、意味、目的から解放されたむきだしの存在そのものが問題になる。生きる行為も同じように何らかの意味、目的（仕事、レジャーなど）から解放され行為それ自体が示されることになる。その時、水のないプールが空虚に見えるように、生には空虚、無が支配する。しかし、この空虚、無は生そのものの始まりとなる。

「(風や天気、変化する光すら関わりがないような)日々の無こそが最大の充溢を約束した。無があった。そしてまた無があった。そしてまた無があった。そしてこの無は、再度の無は何をしたのか？それは意味した。日々の無で多くのことが可能であった。私にも、お前にももっと、もっと多くのことが可能であった。ここで大事なことは我々の日々の無をいま、実らせることなのだ、朝から晩まで（あるいは夜中もふくめて?）」(56)

ハントケがかつて芸術について述べた言葉「芸術はそれ自身を越えた意味を持つのではなく、芸術そのものが意味なのだ。」¹²⁾をもじって言うなら、“生きる行為はそれ自身を越えた意味を持つのではなく、生きる行為そのものが意味なのだ。”ということになるだろう。生きている（生きて・ある）ことだけでも十分充実しているような1日、そんな日をいかに成功させる

かが問題になる。

「充実日にはキャットキル山はキャットキル山であるべきだ。ドライブインへ曲がることはドライブインへの曲がることであるべきだ。日曜日の新聞も日曜日の新聞であるべきだ。夜になることも夜になることであるべきだ。私のとなりの君の輝きは……」(24、25)

この文章の同語反復は単なる修辭法として使われているのではない。充実日には個人がまさしく生きて“いる”、生きて“ある”、ようにすべての物、事象がその比類なき存在性で輝き始める。外界の事象は“ただ、そこにある”ものとして、いわば無意識に知覚されるのではなく、“まさしく、そこにある”ものとして鮮烈に感じられるのである。

4

ハントケは前に引用したヴァン・モリソンの歌は充実日を歌っているのではなく、それはやはり、単なる幸福な日を歌っているに過ぎないのではないかと疑い、かつて充実日にはそれが、危険に満ちた日であることが前提であったと述べている。すなわち、日々の危険を乗り越えた時、初めてその日が成功した、という満足感、充実感がうまれるが、一方、戦争やその他の困窮が遠ざかってしまったように見える時代や世界の地域では日々そのものが危機に面しているのだと言う。

「日々の特別な要請、その義務、戦い、遊びは別にして、純粋な日々それ自体、自由な日々、あらゆる瞬間が可能性としてとらえられるような、そういう日々は、少なくとも今、ここに半ば、平和に生きている我々のような人間には挑戦的なものになったのではないかとそれは友人にもなれるが、同時に敵にもなり得るような、一種の賭け事のようなものになってしまったのではないかと？」(29、30)

日々が戦争、危機、困窮と無縁に何事もなく過ぎ行くと、平和や生の貴重さの意識が薄れていくことは事実である。一方、様々な刺激に満ちた、慌ただしい現代において無為に1日を過ごすことはただ退屈と空虚感しか、生み出さないのかもしれない。我々は新聞、テレビから何か、出来事を望んでないだろうか？また無為に耐えきれず、何らかの行為で日々を埋めようとするのではないかと？1日と共に、ただ「ある」こと、「存在する」ことは現代の我々にとっては乗り越えることのむずかしい「敵」になってしまった、とハントケは言う。しかし、この敵を「友」にして、無為でありながら、一方、決して漫然と1日を過ごすのではなく、1日を成功させるためには、我々はどう具体的に生きれば良いのか？充実日は具体的にはどのような日であるのか？無為と言いつつ、ハントケはやはり、一般的な行為とは別の行為を要求している。

「日々の成功と“～にまかせる (lassen)”；行為としてまかせること；彼は窓の前を霧が流れ

るのにまかせた。彼は家の後ろで草が風でなびくのにまかせた。日射しに照らされるのにまかせることも1つの行為であった。」(80)

主体は霧の流れ、草のなびき、日射しと無関係であるのではない。主体はいわゆる無為ではあるが、そういった現象と触れ合い、呼応し合っている。視覚は外界の事象に様々な形式美を見付け出す。聴覚は外界の様々な美しい音、静寂を聞き分ける。触覚は何かに触れる時の感触を感じ取る。ハントケはこのような外界の現象とわれわれの心の触れ合いを、In den Sinn kommen (感覚の中に染み込んで来る。)、Innewerden (事象の内面化) という言葉をその本来の意味で使い、表現しようとしている。そのとき、我々は外界の現象といわば、一体化し、外界の多様性が我々の内面の多様性になる。(74) 我々には外界の事象が瞬間的にその形象としての美を示し、神々しく輝き始めるような経験があるはずである。ハントケはこの事物の姿を Inbild (実相) と名づけている。ヨーロッパの多くの現代作家はこのような体験をエピファニー (神の顕現) として作品の中で描いている。¹³⁾ 一方、日本の俳句の描く世界も自然の事物、事象が瞬時に示す Inbild (実相) を簡潔、適確に言語化していると言えるだろう。俳句の描く世界とハントケが表現しようとする世界はかなり似ていると言える。実際ハントケは俳句から成り立つ叙事詩を物語る事が最高である、¹⁴⁾ と言っている。

5

「汝、神々しきものよ、かつて予言者を通して、神の子を通して語った“私を越えたもの”よ、汝は現代においても日々を通して直接、語っているのではないか？何故、私はこうして日々を通して語っているもの、どんな瞬間にも新たに語り始めているものをとどめ、とらえ、伝えられないのか？それを私はファンタジーの力で信じているし、知っているのに……“そんな瞬間は存在する、また存在したし、これからも存在するだろう” とかつて神について言われたように、私の今日の日にも言えないのだろうか？」(71)

ハントケがここで述べているように、外界の事象が語っているもの、その Inbild (実相) を見たり、聞いたり、感じたりすることは決して簡単なことではない。我々がそのようなものを常に受け入れる心をもっていなければならないだろう。我々が外界に無感覚である時、外界の事象は我々に何も語りかけては来ない、ただ、そこにあるだけである。しかし、日々の暮らしの中で事物、事象が見せる形式美、神々しいものを感じ取ることが出来なければ、日々の成功はありえない。地平線の朝の光(68)、読書机のエリカの花の青(69)、ドアの取っ手を照らす太陽(70)、なにげない日常の風景だけでもすでに一種の出来事として心をつかまえるような、そんな日が充実日として求められる。ハントケは充実日を経験した友人の例を上げている。そんな友人にとって、1日は成功した、充実していたと感じるには多くのことを必要

としない。1日がただ、長く感じられなかった日、橋に立ち、頭上に空を見た日、朝、子供達と笑った日、何か特別な物ではなく、見ることで自分が幸福をもたらすような日、やさしい声を聞いた日、男が落ち葉のかたまりを避けるように乳母車を押して行った日、庭師の紙幣が枯れて落ちた茎や葉と入り交じっていた日、(76、77)このような、ほとんど何も起こらない平凡な日が充実日としてその日の終わりに感じられるのである。決して大きな出来事の為ではなく、なんでもない、日常の瞬間の光景が感動、充実を生み出す。

しかし、1日の中で充実していると感じる瞬間があれば、それで充実日として十分であるのではない。ハントケはどうしても個々の充実した時間、瞬間だけで充実日には出来ないのである。

「1日がお前にとって、成功したと言えるためには、目覚めから眠るまでのあらゆる瞬間が問題にならなければならない。しかも、その都度、その瞬間が乗り越えられた試練(危機)のようであればならない。」(32、33)

ハントケは実際、この作品の中で彼の充実日を物語っている。朝、起きた瞬間に何か事象に感じる事が出来るなら、例えば、朝、何かの音に対して全身が耳になれるなら、また、最初に何か物を盲目的、投げやりではなく、慎重に目を見開いてつかむなら、また、新しい朝の風や水を顔や手に感じる事が出来るなら、その後の1日の旅にふさわしいリズムが作られたことになるという。しかし、朝のリズムでその日全体をいわば、完璧に生きることは不可能である。1日のそれぞれの瞬間を常に感じとることは不可能である。我々は外界の事象にいつも敏感に反応出来るわけではなく、外界に無感覚に、不注意になったりすることがある。また、不安があったり、不幸な時、そのような外界に反応出来なくなることもあるだろう。また、外界がいつもやさしく、我々に語りかけて来るわけではない。ハントケは殆ど成功するように見えた日が、暖炉の薪を鋸で切っている時、鋸が引っ掛かり、動かなくなり、もがいているうちに薪が足に落ち、その後、暖炉で薪にも火が付かず、そのためにその日がダメになった例、悪意のある視線に出くわしてやはり、そのあと、どのようにその日を過ごして良いのか分からなくなった例を物語っている。なんでもない日々の光景を感じる心は外界に敏感であるがゆえに、小さなことで傷ついてしまう、と言えるかもしれない。

「“充実日”探検旅行の前提として、私自身に対して、私の性格、私という人間のどうしようもなさに対してある程度、寛容さが必要であるようである。同様に、どんな恵まれた状況でも毎日の嫌なこと、たとえば、思うようにならない事物とか、悪意のある視線、ふさわしくない時の一言などを覚悟していることが必要である。」(40)

毎日、当然、起こりうる厭なことをその都度、落ち着いて対応し、行き詰まりからその瞬間を解放させ、変容させることが必要になる。その日が不完全で、悲惨と感じられた日でも最終的にその日の終わりにひそかに“成功した、ふさわしく生きた”と言えれば、良いので

ある。このように考えると、日々を成功させることは一種のゲームのような印象を与える。ハントケ自身、それはほとんど子供の遊びに近いのではないか？(49)と自問している。

6

ハントケの“充実日”は最終的には実現可能なのだろうか？充実日がどんな日になるのかはかなり、明確に提示されている。しかし、1日をハントケの描いているイメージ通り、生きることが出来るのだろうか？彼自身、この作品の中で試みた充実日の物語りは失敗に終わっている。そして作品の中で何度も“お前は充実日をすでに経験したことがあるのか？”という問いが繰り返される。それはまさしく、瞬間の充実を越えて、1日全体を充実、成功させることは、やはり、非常に難しいことを意味しているのではないか？ハントケは彼の祖父が臨終が近づくにつれ、指で部屋の壁を段々、下の方へ引っ掻いていたことを思い出し、「個々に成功しても、全体として絶えず、挫折、失われて行くなら、それは何の有効性があるだろうか？」(79)と日々の成功を悲観してはいる。しかし、一方同時に「それは何の有効性もないわけではない。」(79)と最終的にはかれの充実日構想の意味を強調する。

充実日の理念は絶望の時期に浮かび上がったとハントケは言う。わずかな余生を残し、高く、そそり立つ、剥き出しの岩の上に一人っきりで残されている悪夢のあとに充実日の理念が生まれた、と言う。極端な孤独感、悲惨、絶望の中から対極として充実日のイメージが現れ、それは未来を照らし出す。未来に向け、充実した生の理念を持つことが出来れば、孤独、不幸、絶望から生まれる死は問題にならない。

「そのとき、彼は自分の死と了解したであろう。死は一度たりとも、日々を成功させるゲームを台なしにしなかった。」(75)

ハントケの充実日構想は、そもそも、絶望、孤独、虚無、死など生の否定的側面を克服しようとする試みである、と言えるかもしれない。生の充実感や充実日を求める思いは絶望、孤独、死の感情と切り離すことは出来ないからである。1日の充実には試練や危険が必要であると同様に、不幸、悲惨、絶望、死の意識などが前提になるのではないか？生の充実が絶望や死を否定し、忘れさせてくれるが、同時に絶望や死があるからこそ、生の強烈な充実感が生まれるのではないか？そしてこの充実感は瞬間性を越えて決して長く続くことは出来ない性格を持っているのではないか？この充実感を1日全体において成功させることは、最初から不可能なことなのかもしれない。ハントケもこのような試みは神になろうとするような不遜なことで、それはいつでも殺人、破滅の物語になりうるものかもしれないと述べている。(38)

しかしながら、ハントケの充実日構想が最終的にきわめて実現困難なものであろうとも、

あるべき生の一つの規範として、死、無意味、無形式に脅かされた現実の生を充実、形式美、幸福へと変容させようとする試みであることは確かである。

この作品には『冬の日の夢』という副題がついている。また、モットーとして芭蕉の俳句『冬の日の馬上に氷る影法師』が引用されている。そして作品の最後に新約聖書のパウロ書簡(テモテ書)の「汝、冬の前に速やかに我に來れ、汝、きたる時わがトロアスにてカルポの許に遺し置きたるが外衣を携へきたれ。」(91)の文が引用される。未来が暗く、荒涼とし、寒々とした冬としてイメージされていることは確かである。そのようなイメージの中に救いとして明るい、未来を照らす光としての充実日構想が浮かんで来る。ハントケはこの作品を書くことにより、充実日を具体化、実現可能なものになろうとするが、しかし、それは結局、実現出来ない夢であることが判明する。しかし、この作品がこの夢を描き、作り出したことは否定出来ない。ハントケは『充実日試論』において彼が経験した充実日を書こうとしたのではなく、また実際に夢で見た充実日を作品化したわけでもない。そうではなく、この作品によって初めて“充実日”というものを造り出そうとしたのである。体験したことない、現実には存在しない『充実日』はこの作品を通して初めて生み出される。ハントケが考えている文学において重要なのは現実を客観的に、または批判的に把握することでなく(それは他の学問に任せることである)、彼自身の主観的現実を言語を通して創ることである。ハントケの作品はそれによって現実に対する新しい生き方を提示する。

「私の要求は、存在しているが表現されていない世界(Gegenwelt)を現実世界に対置させることです。それを受け入れる人々が感激してこの世界に、つまり我々の世界に移って来てほしいのです。……生を授けてくれるものとして体験しているものを生の規範のモデルにしたいのです。……俗っぽい言い方になりますが、テレビや新聞、技術、オートメーション化の世界に対抗出来るような世界が欠けているのです。……私が物語を通して描写し、喚起し、関連づけているものは匂うものの世界、つかむことの出来る世界、身近な世界です。つまり、目に見え、感じられる世界です。それを私は現実世界に対抗する世界と名付けたのです。」¹⁵⁾

『充実日試論』がハントケの最近の作品の中で最も明白に、人生、現実に対する1つの新しい生き方のモデルを提示しようとした作品であることには間違いのないであろう。そして同時にハントケは我々がこの生き方を共有することにより、真の共同体意識が生まれることを望んでいる。¹⁶⁾

注

1) Peter Handke: Versuch über den geglückten Tag, Frankfurt/M 1991.

本文カッコ内の数字はすべてこの作品のページ数を示す。

- 2) Peter Handke: Versuch über die Müdigkeit, Frankfurt/M 1989.
- 3) Peter Handke: Versuch über die Jukebox, Frankfurt/M 1990.
- 4) Peter Handke: Die Hornissen, Hamburg 1968.
- 5) Peter Handke: Das Gewicht der Welt, Frankfurt/M 1979.
- 6) Peter Handke: Langsame Heimkehr, Frankfurt/M 1979.
- 7) ハントケ自身、自分を場所を物語る作家として規定している。Peter Handke: Aber ich lebe nur von den Zwischenräumen, Ein Gespräch, geführt von Herbert Gamper, Zürich 1987, S. 19.
- 8) Anm. 6. S. 193.
- 9) Peter Handke: Der Hausierer, Frankfurt/M 1967, S. 5.
- 10) Peter Handke: Ich bin ein Bewohner des Elfenbeinturms, Frankfurt/M 1972, S. 120.
- 11) Ebenda, S. 140.
- 12) Ebenda, S. 43.
- 13) ジョイス、ホフマンスタールが代表として挙げられる。
- 14) Peter Handke: Die Geschichte des Bleistifts, Salzburg, Wien 1982, S. 52.
- 15) Anm. 7. S. 119ff.
- 16) ハントケの最近の戯曲は無言劇で登場人物の意味づけられない動作、仕草や様々な音そのものを前後関係なしで表現している。登場人物たちはお互いにすれちがっても互いの存在に気がつかず、それゆえ、登場人物同士のかかわりもない劇である。この劇はタイトル『我々がお互いについて何も知らなかった時』が示すように我々、現代の人間にはお互いを結びつける共通する生の規範が欠けていることを一つのテーマにしているように思える。Vgl. Peter Handke: Die Stunde da wir nichts voneinander wußten, Frankfurt/M 1992.

(北海学園大学助教授)